



TITLE:

中小企業調査会編 『中小工業の発達』

AUTHOR(S):

堀江, 保蔵

CITATION:

堀江, 保蔵. 中小企業調査会編 『中小工業の発達』 . 経済論叢 1960, 86(6): 434-437

ISSUE DATE:

1960-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/132794>

RIGHT:

經濟論叢

第八十六卷 第六號

西ドイツの農業構造について……………山岡亮一 1

職務給と同一労働同一賃金……………岸本英太郎 22

「散不足」と「聚不足」(≡)……………桑田幸三 39

イギリス革命の「主体」……………尾崎芳治 50

書評

中小企業調査会編『中小工業の発達』……………堀江保藏 76

經濟論叢 第八十五卷・第八十六卷総目録

昭和三十五年十二月

京都大學經濟學會

『書評』

中小企業調査会編

『中小工業の発達』

堀江保蔵

本書は、「中小企業研究」の第一巻として発行されたものである。編者、中小企業調査会は、中山伊知郎教授を総合部会主査として組織されたもので、その使命は、日本の工業化が全体として直面する近代化と自由化との大きな課題のもとで、中小企業の地位を改めて見直すことにあり、この第一巻につづいて、中小企業の統計的分析（第二・三巻）、中小企業の国民経済的役割に関する研究（第四―六巻）が発表されることになっている。

既刊の第一巻は、本調査会第一部会主査、磯部喜一教授の編纂にかかり、題名の示す通り、中小工業の歴史の研究であるが、そのねらいとしたところは、中小工業全般を、たとえば大企業

との連関においてみるとか、世界の主要諸国との比較においてみるとかの方法を避けて、そのような方法ができるためのデータを集積すること、すなわち中小工業の発達過程の業種別説明を累積することである。そのために、無数ともいふべき業種のなかから、どんな指標によつて研究対象を選んだかということ、（１）発達過程の主要な各類型をもらさないようにすること、（２）重化学工業部門から軽工業部門まで各種の工業部門について代表的なものを取りあげること、の二つであつて、これにしたがつて選ばれた業種と責任執筆者とを掲載順序にしたがつて示すと、左のごとくである。

第一部	鋳物工業の発達	市川弘勝
第二部	機械工業の発達	伊東岱吉
第三部	絹織物工業の発達 —— 播州織の生成と発展 ——	藤井茂
同（補）	泉州機業の発達	前川亨一
第四部	絹人絹織物工業の発達	倉持仲子
第五部	陶磁器工業の発達	小林義雄
第六部	漆器工業の発達	田杉競
同（補）	会津漆器工業の発達	磯部喜一

さて、第一部は、素材産業である製鉄業に筆を起し、鋳物業については古代から叙述しているが、主要部分は明治以後の発達状態であつて、その大筋と企業としての特性について『日露

戦争後から第一次世界大戦の時期までに、一応の産業革命を経、従来の日用品鑄物から機械鑄物への転換とあいまって、機械工業の基礎部品工業の一環として、資本主義の発展とともに発展を遂げた。しかしながら、鑄物工業の生産工程は比較的単純であり、その固定設備も大きくなく、資本の有機構成はきわめて低い。したがって、鑄物工業における企業の零細性は顯著であって、産業革命を経たとはいえ、技術水準の低位性と技術進歩の停滞性とは著しく、生産工程においても、企業経営の面においても、非近代性はかなり多く残存された』（三八—九頁）と書かれている。言葉尻をつかまえて悪いようだが、日露戦争までの時期に、近代工業として成立しうするための技術上の変革による産業革命を一応達成した鑄物業（二四頁）が、大正、昭和時代においても、生産工程や経営面において、なぜ非近代性を残存したのであるか、について、鑄物業に内在する要因の歴史的説明が欲しかった。

第二部は、各種繊維機械のうち、とくに絹紡織機を対象として、その完成機の生産および主要部品ないし用品工業を含む独自の工業構造の形成・発展の過程を研究したものであって、しぜん、叙述は中小企業に限られていない。うち、紡機については、わが国の綿業が長いあいだ輸入紡機に依存していた事情と、第一次大戦を機会に創成期を迎え、昭和五、六年ごろに確立した事情とが、詳しく叙述されているが、ここで質問したいのは、

『部品生産の発達→部品市場の形成→部品組立・完成機生産という順序でなく、……完成機工業の発展に主導されて行われた点に、わが紡機工業のおいたちの転倒的な特質がうかがわれる』（六三頁、六七頁）と説明している点である。紡機については、それを需要する企業の側の特質を反映して、大中小さまざまなメーカーが並列的にできたこと、大資本の生産手段生産部門に対する経営態度が商業資本家的であって、技術改善のための研究投資をきらう傾向が強かったことなど、ポイントをついた記述が少なくない。

第三部は、寛政年間に飛田安兵衛（大工職）という『卓越した企業家』（一〇三頁）の出現によって、農村工業として起ってきた兵庫県西脇地方の綿織物業の研究である。明治三年に力織機を採用して近代化し、第一次大戦と関東大震災を機会に輸出産業化した播州機業が、その発展にもかかわらず大規模化しなかった事情を、動力・製品・労働組織・需要・労賃などとの関係から詳しく説明し、不断に減ってきた問題点として、規模および資本力が小さく、業者に積極的な近代化の意欲が乏しいことと、過度競争を取りあげている。問屋との関係その他の点で、遠州織物の発達過程との異同を随所に掲げている点も、興味深く読まれる。

第四部では、輸出羽二重の製織に先鞭をつけた桐生がなぜ石川・福井に負けたか、ということから始まり、主として石川・

福井両県における絹人絹工業の明治二〇年ごろ以降の発展を述べている。ここで興味があるのは、(1) 両県とも輸出羽二重産地として、在米の織物業に關係なしに発達し、したがって因習にとらわれないで生長しえたこと、(2) 機械化しても、動力(電力)が簡易にえられたため、零細業者も存立しえたこと、(3) 石川では産元(問屋)支配が強く、福井では各業者が独立的であるという組織の相違が、業者の態度や、景気変動に際しての対処の仕方、絹から人絹への移行の遅速などに大いに影響していること、などについて説明した個所であるが、全体としてややラフな感じがする。

第五部は、陶磁器産業における近代化の過程を検討し、そこになお広範に残存している中小零細企業の経済的基盤を明らかにしようとしたもの。陶磁器産業の近代化は輸出の關係から着手され、有田に香蘭社(明治七)、精磁社(明治二〇)なる機械化企業が起ったが、いずれも永続せず、粟田では大規模業者が出ながら機械化せず、結局明治三十七年に名古屋で森村組によって日本陶器合名会社が設立されるにおよび、はじめて近代化への道が開かれた。近代化におくれた事情が、輸出需要が主として趣味品に属する絵付陶器であったこと、したがって、日常食器の生産においては技術的に外国業者と到底太刀打ちができなかったこと、などが詳しく書かれており、また近代化が商業資本を担い手として行われたとしている点も興味深い。ただ、全

体の叙述が近代化を完成した大企業を中心にして書かれていて、中小企業そのものに焦点を合せていないことが遺憾である。

第六部漆器工業。これは執筆者が長年手がけられた部門だけに、主要産地の全部をおおい、かつ各産地の製品や生産組織の特質を浮き出させるなど、きわめて手ぎわよくまとめられている。明治時代に輸出品として重要な地位を占めた漆器が、大正に入ってからにはむしろ内需に依存するようになった事情を、ふつうには見おとしがちな鉄道の発達、百貨店などの販売機関や販売組織の整備に求めている点も、筆者の実証的な研究態度をよく示すものであらう。

以上、補論として書かれた二篇をのぞいて、本書の内容を簡単に紹介した。ところどころ疑問に思ふ点がないではないが、中小工業の発達過程の業種別究明を累積したいという編者の意図は、かなりの程度において実現されている。しかしながら、全体として、読後感を卒直にのべさせてもらうならば、そこにはつぎのような点がある。

第一は、業種選定の基準になった指標についてである。本書では、発達過程の類型に着目して、主要な各類型をもらさないようにすることをもって第一の指標とし、第二の指標を工業各部門にわたることにおいているが、近代化と自由化という課題のもので、中小企業の地位を見直すという、この研究全体の立場からみると、そこには別の指標が考えられなかったか。たとえ

ば、大企業が成立しなかった業種、大企業と競合関係に置かれた業種、大企業の存立をまっぴらして発達してきた業種というふうに分けて、それぞれについて代表的なものを選んで、その発達過程を研究するのも、一つの行き方であつたらう。また、均質のものを大量生産する業種とそうでないものについて類型を求めるといふやり方もあつたであらう。

第二は、執筆者に経営学の大家が加わつておられるにもかかわらず、経営史的なニュアンスが乏しいことである。とくに私物が物足らなく思つたのは、企業者ないし経営者の性格とか意欲とかについて、真正面から取り上げられていないことである。

もちろん、個々的には、たとえば播州織物の創始者として『卓越した企業家』飛田安兵衛のことが書かれている。しかし、やはり近代化という観点からすると、リーダー＝フォロワー関係がどうであつたか、業界全体の企業者の性格がどうであつたかということとは、すこぶる大切な問題であつて、たとえば川口の鋳物業が、産業革命を一応は達成しながら、いつまでも技術面・経営面ともに非近代的なまままで停滞した事情などは、この点を究明することによつて、いっそう明かになるのではなからうか。とはいへ、歴史上の人物についてこのような研究をする

ことは、いうべくしてたやすくは行われたいことであるが、しかし、このような方法を多少とも取入れることによつて、中小企業に関する新しい着眼点を打出してはしなかった。

かえりみるに、中小企業について総合的な研究が行われはじめたのは、昭和十三年のことであつて、同年、日本学術振興会に、中小工業に関する基本的及び時局的諸問題を研究するため、第二十三小委員会が設けられ、爾後戦時中までにわたつて数冊の報告書が出版された。小委員会が課題としたところは、要するに、国民経済的観点からする中小工業の振興ということであつた。ところが、今日新たに設けられた中小企業調査会の研究課題は、重点が中小工業の近代化におかれているようである。

そこには、日本経済のいわゆる二重構造をいかにして、またいかなる方向に向つて、解消するかの方策論的意図が強く横たわつていてと考えられるが故に、さきにのべたような二つの注文を掲げた次第であつて、したがつて私は、全巻の刊行が完了した晩には、第二十三小委員会の報告書とはちがつた味のものになるであらうことを期待してやまないものである。(A5判、四六七頁、昭和三五年七月発行、東洋経済新報社)